



大阪+知的障害+地域+おもろい=創造

知の知の知の知

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所情報誌通算 2685号 2015.10.23 発行

菊池桃子氏を「1億総活躍国民会議」の民間議員に抜擢 産経新聞 2015年10月22日

菊池桃子さん（撮影・戸加里真司）



政府は22日、第3次安倍晋三改造内閣の目玉政策「1億総活躍社会の実現」に向けた具体策を話し合う「1億総活躍国民会議」の民間議員に、タレントの菊池桃子氏を充てる方針を固めた。菊池氏は元アイドルとしての知名度に加え、子育てとタレント業を両立し、労働問題にも強い思い入れがあるなど「1億総活躍」を体現する第一人者として白羽の矢が立った。

加藤勝信1億総活躍担当相が23日の記者会見で、国民会議のメンバーを発表する。

民間議員に内定した菊池氏は、タレント業の傍ら、平成24年から母校の戸板女子短大の客員教授に就任し、労働分野の講義を担当。同年には法政大大学院で雇用問題を専攻し、修士号も取得している。長女が乳児期に脳梗塞になり、左手足にまひが残った経験から、障害者問題にも造詣が深い。

このほか民間議員には、「消滅可能性都市」の問題を提起した「日本創成会議」座長の増田寛也元総務相のほか、経団連の榊原定征会長、日本商工会議所の三村明夫会頭、日本総合研究所の高橋進理事長、慶応大の樋口美雄教授らも内定した。民間議員は十数人になる見通しだ。

有識者以外には、安倍晋三首相や加藤氏、甘利明経済再生担当相、石破茂地方創生担当相ら関係閣僚が参加する。国民会議は29日に初会合を開催する方向で最終調整している。

政府は国民会議の議論を踏まえ、11月にも緊急対策第1弾をまとめ、来春には具体的な政策パッケージとなる「ニッポン1億総活躍プラン」を策定する。

【キラリ甲信越】新潟市の「茶の間」1周年 包括ケアの要 拡大目指す

産経新聞 2015年10月23日

地域住民の誰もが気軽に立ち寄って好きな時間を過ごしたり支え合ったりできる「実家の茶の間・紫竹」が、新潟市東区紫竹に開設されてから1年を迎えた。新潟市が空き家を活用して昨年10月に立ち上げた交流拠点で、1日平均の利用者数は高齢者を中心に約40人で、子育て中の親や障害者らも集う。同市は医療や介護、生活支援などを一体的に提供する「地域包括ケアシステム」の一翼を担う拠点として、市内全域への拡大を目指す。（臼井慎太郎）

実家の茶の間・紫竹は築約45年の木造2階の一戸建て。新潟市が借り上げて家賃や光熱費、開設準備費を負担し、任意団体「実家の茶の間」と共同で運営している。毎週月曜と水曜の午前10時～午後4時にオープンしている。

実家の茶の間の河田瑠子代表は、平成9年に高齢者でも子供でも自由に集える「地域の茶の間」を開設するなどの実績を持ち、培ったノウハウを今回の拠点運営に生かした。

拠点への参加費は300円。昼食は別途300円が必要となる。これらや日用品、服などを持ち寄って開くバザーの売り上げなどを運営費に充て、軌道に乗せた。開設以来の累計利用者数は視察や研修目的の市内外からの来訪者も含め、9月末時点で4455人。このうち子供は297人となっている。

◆心地よい場作り

19日に1周年を祝う会が開かれ、みたけ保育園（東区）の園児からプレゼントなどが贈呈されると、会場は和やかな雰囲気に包まれた。子供夫婦と同居する男性（89）は開設以来、毎週通っているといい、「ここに行くのと笑顔で迎えてくれて親切。いろいろな人と昔話ができる」と、いきいきとした表情で感謝の言葉を口にした。

利用者は思い思いに過ごせるが、心地よい場所を作るためのルールがさりげなく壁に掲示されている。例えば「どなたが来られても『あの人だれ』という目をしない」だ。

河田代表は「1杯のお茶をきっかけに、いろいろな立場の人が知り合って助け合う関係をつくり、利用者の表情が元気になる日々を実感している」と話す。

利用者自らが役割を見だしやすい場でもある。各種の当番は「手挙げ」方式。自主的に名前を書き込める当番の表は、だいたい埋まっていくという。

地域の交流の場が400カ所以上ある新潟市内の中でも、実家の茶の間は先進的なモデルだ。

◆高齢化への備え

新潟市の全人口に占める高齢者（65歳以上）の比率は平成26年度末で26・0%だが、団塊の世代が75歳以上となる37年度末には31・5%に高まる見通しだ。

同市は超高齢化社会を見据えて昨年6月、地域包括ケアシステムの構築に全力を挙げる方針を示し、その一つに「居場所をベースにした支え合い活動」を位置付けた。実家の茶の間もその一環。来年度中に東区以外の全区にも1カ所ずつ、河田代表の実践ノウハウを生かした「モデルハウス」を開設したいとしている。

課題はハウスを支える人材の育成。地域の支え合いを支援するため、市が公募で選んだ7人の「高齢者生活支援コーディネーター」が活動中で、河田代表が相談役を担っている。

地域の支え合いは、厚生労働省が推進する地域包括ケアシステムの中に位置付けられた。篠田昭市長は『「多世代型」の場づくりは子育て環境の充実や健康寿命の延伸につながり、保健師など関係者の意欲も高める』と意義を強調する。

国は医療と介護、予防を「葉」、生活支援を「土」、住まいを「植木鉢」に例えている。河田代表は「土に栄養がなければ3枚の葉は育たない。支え合いで土を豊かにしたい」と、活動のさらなる進化と普及に決意を新たにしている。

「自動運転車」のルール作り、本格始動…警察庁

読売新聞 2015年10月22日

ドライバーが運転操作をしなくても安全に走る「自動運転車」の開発が進む中、実用化を見据えたルール作りが本格的に動き出す。

「究極の安全技術」とも呼ばれ、事故の減少や渋滞の緩和が期待

◆段階別の自動運転

	レベル	内容	
安全運転支援	1	加速、操縦、ブレーキのいずれかをシステムが行う	現行法で可能
準自動走行	2	加速、操縦、ブレーキの複数システムが行うが、必要に応じてドライバーが操作	
	3	加速、操縦、ブレーキのすべてをシステムが行う	
完全自動走行	4	ドライバーが全く関与しない	

される一方、事故が起きた時の責任の所在など実現に向けた課題は多い。23日には警察庁が専門家らによる検討委員会を設置し、法律や制度上の課題を整理したうえで、法改正を含めた法整備を

自動運転車の主なメリット

- 渋滞の解消
- 交通事故の減少
一定の車間距離を維持
- 高齢者の移動支援

実用化に向けた課題

- 事故時の責任の所在
- 道路交通法など関連法の整備
- 運転免許制度や自動車保険のあり方
- 専用レーンなどのインフラ整備
- ハッカーによる乗っ取りなどへの対策

目指す。「運転手の不注意や判断の遅れなど人為的なミスによる事故や渋滞が減り、地方の高齢者や障害者の移動手段にもなるだろう」。日産自動車の広報担当者は“夢の車”に期待を込める。

障害者の就労定着へ 松山で全国交流会

愛媛新聞 2015年10月23日



障害者雇用などへの理解を深めた「障害者問題全国交流会 i n 愛媛」＝22日午後、松山市一番町3丁目

障害者雇用を考える「第18回障害者問題全国交流会 i n 愛媛」が22日、愛媛県松山市のホテルなどで始まった。全国の経営者ら約630人が講演や分科会を通じ、障害者と健常者が共に働ける社会の実現に向け理解を深めた。23日まで。

中小企業家同友会全国協議会（東京）が隔年で実施し、中四国での開催は初めて。協議会の内田五郎障害者問題委員長があいさつで「交流会で学んだことを自社や地域に生かしてほしい」と呼び掛けた。

全体会で、愛媛大の山本万喜雄名誉教授が「共に育ち合い、働いて元気になる」と題した講演で問題提起。続いて経営労働、社員教育など五つのテーマで分科会が開かれた。

自動枝豆むき機「テクノフェア」に出品 利根実生が最優秀賞

東京新聞 2015年10月23日



むくゾウくんを前にする開発した利根実チーム＝沼田市で

沼田市の利根実業高校の機械システム科プロジェクトチームが自動枝豆むき機を開発し、県内の工業高校生のプレゼンテーション大会「テクノフェア2015」で最優秀賞を獲得した。（山岸隆）

開発したのはいずれも三年生で甲崎樹（たつき）君を班長とする計六人の男子生徒。利根実では食品文化コースの生徒たちが二〇一一年に枝豆を使ったB級グルメメニュー「えだまメンチ」を開発し、市内の飲食店など

で販売されている。その枝豆は市内の障害者就労支援施設でむいているが、手作業で手間がかかり、供給量が追いつかない状態になっている。

そこで、機械システム科の生徒たちが、効率の良い自動の枝豆むき機を作ろうと、研究を重ねてきた。作品の名前は「むくゾウくん」で、二つのローラーを回転させて枝豆をむく。去年三月に一号機を製作し、今年六月から二号機のむくゾウくんの作製に着手した。モーターのスピードを調節できるようにしたり、工夫を重ね、性能をアップさせた。むくゾウくんは枝豆をむいている施設に寄付される予定だ。

チームの生徒たちは「今回のプロジェクトで、物作りの面白さを知ることができ、地域に期待される喜びを感じた。この作品が一般家庭にも普及すればうれしい」と話していた。

同フェアは毎年開かれており、今年で十九回目。今年は今月二日に伊勢崎市で開かれた。利根実は群馬、栃木、茨城の三県の代表が技術を競う来年二月に栃木県足利市で開かれる北関東大会に出場する。

和歌山) 障害者スポーツ・紀の国わかやま大会、あす開幕 朝日新聞 2015年10月23日

第15回全国障害者スポーツ大会「紀の国わかやま大会」が24日開幕する。13の正式競技が26日まで県内5市2町で繰り広げられる。24日の開会式には選手や抽選で決

まった観覧者ら計約1万8千人が参加する。

開会式は午前8時40分から和歌山市の紀三井寺公園陸上競技場であり、約300人が和歌山の魅力を伝えるパフォーマンスや歌を披露。同9時50分ごろから各選手団が入場行進する。

会期中は、陸上にいずれも昨年優勝した生馬知季選手（100メートルなど）や立花崇選手（砲丸投げなど）らが出場。水泳には昨年、大会新記録を出した中村智太郎選手（50メートル自由形など）らが出場し、活躍が期待される。県内各地では交通規制が実施される。24日は午前8時55分から午後3時20分ごろまで和歌山市内の国道42号、けやき大通り、宮街道などで一時、通行止めになることがある。阪和自動車道・湯浅御坊道路・紀勢自動車道では、午後2時ごろから同6時ごろまで、阪南一すさみ南インターチェンジ間で一時、通行止めや速度制限を含む交通規制がある。（平畑玄洋）



手島選手ら健闘誓う 読売新聞 2015年10月23日 滋賀 右手を挙げて宣誓する手島選手（大津市で）

◇障害者スポーツ 県選手団壮行式

和歌山県で24～26日に開かれる第15回全国障害者スポーツ大会「紀の国わかやま大会」に出場する県選手団の結団・壮行式が22日、大津市の県公館で開かれた。

昨年度の県障害者スポーツ大会の成績などを参考に、個人6競技で15～75歳の選手33人を選出。役員29人を合わせ、計62人の選手団が結成された。式では、三日月知事が「厳しい練習や合宿で積み重ねた成果を、県民代表として大いに発揮されることを祈ります」と激励。倉谷義数団長から開会式で旗手を務める酒井貴勝選手（陸上）に団旗が手渡された。

選手団を代表し、手島美知子選手（アーチェリー）は「日頃鍛えた力と技を正々堂々と発揮し、自信と誇りを持って一生懸命頑張ることを誓います」と宣誓した。

障害者施設で職員が入所者に暴行しけが

NHK ニュース 2015年10月22日



横浜市にある知的障害者の入所施設で、21歳の男性職員が入所者の顔を踏みつけてけがをさせていたことが分かり、横浜市は虐待の疑いもあるとみて調べています。

これは横浜市泉区にある知的障害者の入所施設「ぼらいと・えき」が22日、記者会見して明らかにしたものです。それによりますと、この施設に勤務する21歳の男性職員が先月27日、施設内の共有スペースで20代の男性の入所者の顔を踏みつけて全治3週間のけがを負わせたということです。入所者がけがをしていることに同僚の職員が気づき、施設側と一緒にいた男性職員から話を聞いたところ、暴行の事実を認めたということです。

これまでの聞き取りに対して、「床に横たわっていた入所者を引き起こそうとした際、相手のひじが自分の顔に当たり、かっとなって顔を踏んでしまった」と話しているということで、施設では男性職員を自宅で謹慎させるとともに横浜市に報告しました。横浜市は虐待の疑いもあるとみて、職員や入所者から聞き取りをするなどして調べています。

会見した「ぼらいと・えき」の岩本克巳施設長は「けがをされたかたやご家族に深くおわびをするとともに、職員の研修を充実させるなどして再発防止に当たりたい」と話しています。



障害者にヘルプカード…宇都宮市が配布 宇都宮市が作成したヘルプカード

読売新聞 2015年10月23日

◆緊急時、必要な情報示す

宇都宮市は、障害を抱えた人が、災害などの緊急時や、外出した際に周囲に協力を求めやすくなるよう、緊急連絡先などを記入する「ヘルプカード」の配布を始めた。

カードは蛇腹折りになっており、折りたたむと運転免許証程度の大きさ。氏名や緊急連絡先、かかりつけ医や飲んでいる薬、配慮してほしいことなどを記入する。耳が不自由で筆談が必要だったり知的障害を抱えていたりして、自分の意思を周囲に伝えることが困難な人でも、カードを示せば、どんな支援が必要か示すことができる。カードは耐水性に優れた紙を使用。表紙には赤地に白の十字とハートをあしらった「ヘルプマーク」を入れた。1万6000部作成し、市役所本庁舎や各地区市民センターなどで無料配布している。

東日本大震災の後、緊急時に役立つヘルプカードを導入する動きが全国で広がっている。市は、来年度に行政機関や民間事業者に障害者への差別を禁止する「障害者差別解消法」が施行されることに合わせ、カードを作成した。

ヘルプカードの問い合わせは市障がい福祉課（028・632・2353）へ。

ブルーハーツ元ドラマーと共演も 尼崎で障害者の音楽催し

神戸新聞 2015年10月23日



障害者の音楽イベントを実施する主催者＝尼崎市役所

阪神間の障害者支援団体が主催する音楽イベント「Tetoto Fes（テトトフェス）」が31日、兵庫県尼崎市の阪神尼崎駅北側の中央公園で開かれる。人気ロックバンド「ザ・ブルーハーツ」の元ドラマー梶原徹也さんと、障害者メンバーの共演もある。

尼崎で障害者支援を行うNPO法人「shake hands 握手」の副理事長中村清仁さん（39）が、障害者と一緒に演奏活動などを行っている梶原さんに依頼し、2014年に始まった。阪神間の5団体からなる実行委を結成し、2回目。

自閉症や身体障害のある高校生や支援者でつくるバンド「シェイクオブロック」と梶原さんの共演もあり、ザ・ブルーハーツの「トレイントレイン」などを披露する。

その他、同市出身の男性デュオ「ラブハンドルズ」など全10組が出演。障害者スポーツを紹介するブースや、食べ物や雑貨などの屋台40店も出店する。

中村さんは「障害者が自分を自由に表現する場になり、音楽を通して多くの人と手と手をつなぐイベントにしたい」と話している。

午前10時～午後4時。事務局TEL06・4981・9655（石川 翠）

精神疾患の治療につながる分子メカニズム解明

河北新報 2015年10月23日

精神疾患や発達障害に深く関連する脳の領域が、正常に働くための分子メカニズムを、岩手医大医歯薬総合研究所の祖父江憲治所長らの研究グループが初めて解明した。うつ病や統合失調症といった精神疾患、自閉症などの発達障害に有効な新薬や治療法の開発につながる可能性がある。21日付の米科学誌ジャーナル・オブ・ニューロサイエンスに発表した。

研究グループはマウスを使い、脳の情報伝達に関わる脳内の神経細胞同士の結合部（シナプス）に多く含まれる特定のタンパク質の遺伝子が欠損した状況をつくり出した。

マウスには記憶や認知機能の著しい低下や、活動が弱まる強い不安行動もみられた。大脳前頭前皮質ではシナプスが機能しなくなり、情報伝達に障害があったことが分かった。

遺伝子が欠損した神経細胞では、別のタンパク質が活性化し、正常なシナプスを作ることを阻害していた。この解析から正常なシナプスを作るための分子メカニズムを突き止めた。

祖父江所長は盛岡市内で記者会見し「精神疾患の個々の症状を解析し、神経伝達のメカニズムをさらに解明することが人にも応用できる新薬開発につながる」と意義を説明した。

認知症徘徊 メールで捜索

徘徊かな？と思ったら
こう声掛けをしよう

特徴	声の掛け方
左右で違う靴を履いている	距離を置き、まずは見守る
雨なのに傘をさしていない	笑顔であいさつ
季節に合わない服を着ている	後ろから声を掛けない
何も持たずに歩いている	目線を合わせ優しい口調で
道ばたに座り込んでいる	おだやかにはっきりと語る
視線が定まらずキョロキョロ	言葉に耳を傾けゆっくり対応

中日新聞 2015年10月21日

認知症による徘徊（はいかい）で行方不明になったお年寄りをいち早く見つけ出そうと、携帯電話への電子メールで不明者情報を発信する取り組みが全国の自治体に広がっている。地域の目で認知症の人を支えようという試みだが、住民による声掛けには認知症に対する知識も必要で、地道な見守り

の態勢づくりが欠かせない。（稲田雅文）

「どちらへ行かれますか？」「実はどう帰ればよいのか分からないんです。朝から何も食べていなくて」「それは大変ですね。一緒に近くの交番に行きましょうか」。10月上旬に名古屋市中区が開いた模擬訓練。認知症の人に扮（ふん）した市職員が小学校の校庭を歩き、住民たちがどのように声を掛ければよいのか学んだ。

徘徊には、目的もなくうろろ歩いているイメージがあるが、「実家に帰る」「人に会いに行く」など本人なりの目的があって外出し、道に迷ってしまうことが多いという。不安を感じていることが多いため、訓練では後ろから話し掛けないことや、「こんにちは」とあいさつから始め、相手に目線を合わせて優しい口調でゆっくり対応することなどの注意点を伝えた。



名古屋市は2012年から「はいかい高齢者おかえり支援事業」を開始し、模擬訓練はその一環。個人が参加する「おかえり支援サポーター」や介護事業者、タクシー会社、量販店などの協力事業者に対し、行方不明になった人の年代と身長などの身体的特徴、服装などを記した「捜索協力依頼メール」を配信する。今年9月末時点でサポーター2344人と、協力事業者5692カ所が登録している。

徘徊をする可能性がある家族がいる人は、事前に市に登録しておき、行方不明になった時に警察に届け出た上で、メールの配信を市に依頼する。877人が事前登録しており、14年のメール配信の実績は99件。15年は9月末時点ですでに123件に達した。これまでに7人がこの仕組みで保護された。

課題は、徘徊するお年寄りが公共交通機関に乗るなどして、市内にとどまらないこともあることだ。名古屋市は、市外の人にもサポーターに登録

してくれるよう呼び掛けているほか、同様のメール配信をしている近隣9市町と連携する。

徘徊している認知症の人は手助けが必要かどうか分かりにくいことも課題だ。参加者2千人を超える規模の模擬訓練を実施するなど、先進的な取り組みを行う福岡県大牟田市の担当者は「左右で違う靴を履いていたり、雨なのに傘をさしていなかったりと、おかしいと思ったらできるだけ声を掛けてほしい」と話す。

認知症による行方不明者 警察庁によると、2014年に認知症の人が行方不明になったとして届け出があったのは全国で1万783人。前年より461人増え、2年連続で1万人を超えた。厚生労働省は12年に462万人だった認知症の人が、25年には700万人に増加すると予想しており、行方不明者も大幅に増えそうだ。

選択肢増える乾癬治療

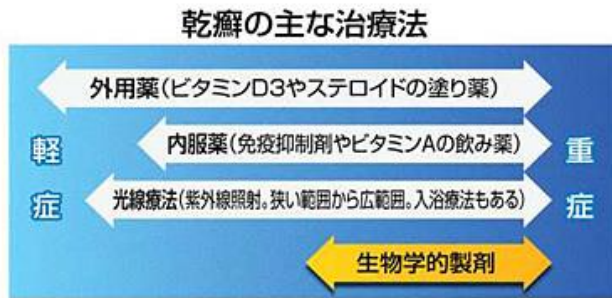
中日新聞 2015年10月20日

「生物学的製剤」 劇的な効果 自己注射など 副作用も少ない

皮膚が赤く盛り上がる慢性的な発疹「乾癬（かんせん）」の患者は、国内で推定20万人に上る。発疹が全身に広がったり、ひどい関節炎を伴ったりして、社会生活が困難になる患者もいる。5年前に保険適用になった生物学的製剤が劇的な効果を上げ、治療の選択肢が増えている。（稲熊美樹）

乾癬は頭やひじ、ひざなど、局所的に発症することが多く、人にうつることはない。発疹には、明確な境界があり、赤く盛り上がるのが特徴だ。

患者の9割は、発疹が局所にとどまる尋常性乾癬。しかし、関節炎を伴う関節症性乾癬や、発疹が全身に広がる乾癬性紅皮症、痛みや熱を伴う膿疱（のうほう）性乾癬などの重症になると、生活の質に影響し、入院治療が必要になることもある。メタボリック症候群など、併存しやすい病気もある＝図（右）参照。



名古屋市立大学院医学研究科の森田明理（あきみち）教授（加齢・環境皮膚科学）は「生活の質で見ると、身体的な負担は心筋梗塞や糖尿病と変わらず、精神的にはがんと同等」と乾癬の症状の重さを表現する。

従来の治療は、外用薬や内服薬、紫外線を使った光線療法が柱だった。ただ、全身に薬を塗るには時間がかかり、かゆみを抑えきれないこともある。光線療法も新たな機器が開発されて進歩しているが、通院頻度が高く、患者の日常生活に影響する。

生物学的製剤は、生物が産出するタンパク質を利用して作る。「特定の分子に働くため、薬物そのものによる副作用が少ない画期的な治療法」（森田教授）だ。4種類あり、家で自己注射できるものもある。使用頻度は、2週間おきから3カ月おきまでさまざま。感染症を起こしやすくなることもあるため、投与前には全身の検査が必要となる。

乾癬に併存する疾患



※名古屋市立大の森田明理教授による

治療できる医療機関は限られており、皮膚科だけでなく内科などとの連携が必要になることもある。森田教授は「発疹が手のひら10枚分以上に広がっている場合には、併存する疾患が増えたり、治りにくくなったりするので、一度専門医を受診してほしい」と呼び掛ける。

長年患った男性 「人生救われた」

「壊れていた私の人生を、生物学的製剤が救ってくれた」。名古屋市の男性（53）は喜びをかみしめる。

中学3年のときに発症。20代後半は股関節が痛く、歩くど

ころか寝たきりに近い状態。生きる気力もわかなかった。「痛くて眠れないこともあり、トイレに自分で行けることすら幸せだと感じていた」。関節症性乾癬のため、20代後半と30代前半のときに股関節の手術を受けた。

大学卒業後にアルバイトを転々としていたが、通勤が難しく、やめざるを得なかった。少しでも通院が楽になるようにと、両親と病院の近くに引っ越し。病床で必死に勉強して、20代後半で税理士の資格を取得した。

ただ、関節の手術は受けたものの、全身のかゆみや痛みは続いていた。生物学的製剤の治験に手を挙げて、2007年から参加。劇的に症状が改善し、25歳のころから20年間飲み続けていた痛み止めの薬もいらなくなった。「乾癬は見た目にも分かり、かゆみもつらい。今、人生を取り返している最中です」

障害者雇用促進も - 編集委員 辻 恵介

奈良新聞 2015年10月23日

第3次安倍改造内閣の基本方針は、1億総活躍社会の実現に向けた、強い経済、子育て支援、社会保障の「新三本の矢を放つ」ことだという。

だが、「1億総活躍社会」と言われると、かつてのスローガンに「一億一心」「一億玉砕」「一億火の玉」などといった言葉があふれた時代を知る世代には、いささか抵抗があるかもしれない。

秋の高い空に突如上がったアドバルーンのように、具体的にどんな工程で実現させていくのか未知数で現実味がない。

例えば「障害者雇用」の問題。平成28年4月から「障害者雇用促進法」が改正されるが、企業の受け入れ態勢などはどうなっているのか。企業に求められる障害者の法定雇用率は現在は2.0%だが、30年からは引き上げられる可能性が大きいという。そうした身近なところに目を向けていかないと、「1億総活躍社会」など掛け声だけで終わってしまう。

そんな中、県内では新しい動きがあった。障害者支援のNPO法人ポエムの「雪丸カフェポエム」が、17日から王寺町の、りーべる王寺東館5階、町地域交流センター内で営業を始めたのだ。

健常者2人、障害者ら2~4人が接客。飲み物やケーキなどを低価格で提供している。JR王寺駅に直結するビルの中にあり、大型商業施設の買い物客や駅の利用客も気軽に立ち寄れる。河合町といった近隣の福祉作業所などで作った商品も販売されていて、活動の広がりが期待できそうだ。問い合わせは電話080(9127)6955。

同じ北葛城郡内では、上牧町の「Cafeぷらっと」も注目される。こちらは平成17年9月に、社会福祉法人上牧町社会福祉協議会が開設したもの。

現在は、同25年10月から同町保健福祉センター(2000年会館)で営業。7人のスタッフが毎日数人ずつ交代で働いている。17日に大和郡山で開かれた「第7回スイーツ甲子園奈良大会」に出品したパウンドケーキは、見事グランプリを受賞した。連絡先は0745(76)6098、内線133。

頑張っている障害者を雇用したくても、中小企業にとっては、大手と比べて受け入れ負担も大きい。それでも本県の障害者雇用率は2.22%(平成25年度)で、2年連続で全国3位という。関係者の地道な取り組みが実を結んでいるようだ。地域において、皆が総活躍できるような具体策を新大臣にも打ち出してほしい。

月刊情報誌「太陽の子」、隔月本人新聞「青空新聞」、社内誌「つなぐちゃんベクトル」、ネット情報「たまにブログ」も

